

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：31204

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12314

研究課題名(和文) 海外派遣労働者の配偶者における生活適応状況の特徴の明確化とコミュニティ支援の検討

研究課題名(英文) Development of A Model to Predict Adjustment of Spouses to Life Overseas: Trial of a Method of Community Support

研究代表者

青柳 美樹 (Aoyagi, Miki)

岩手保健医療大学・看護学部・講師

研究者番号：60334976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：海外駐在者の妻のストレス反応に関連する要因の特徴と支援ニーズを明らかにするとともに、コミュニティ支援としてポジティブ思考促進のためのテーマを設定したワールド・カフェを試行・評価した。【方法】Web調査とインタビュー、ワールド・カフェを実施し量的・質的に分析した。【結果】ストレス反応は、未就学児を有し、外出しにくい等の環境要因があったとしても、相談者や人との付き合いによって低減していた。また、海外生活の中で社会的役割を獲得し、ネットワークを作っていた。また、自己の体験を意味づけし、新たな価値観を得ていた。ワールド・カフェ参加者は、互いの体験に共感し、安心感を得るとともに、自信を得ていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

毎年2～3万人の夫の海外赴任に同行する配偶者が存在するにもかかわらず、予防的な視点からの研究は僅少であった。ストレス反応に関連する要因の特徴や、海外生活における体験をポジティブにとらえて意味づけをすること、役割を獲得することなど、渡航前の配偶者自身が予測的に認識することができること、自己を客観的にとらえることにつながると考える。そして、配偶者同士の自助につながる可能性がある。また、企業の人事担当者、産業保健担当者にとっては、海外派遣労働者及びその配偶者への研修・教育の資料となる。限界として、量的研究におけるサンプルサイズが小さいことであり統計学的分析に課題がある。

研究成果の概要(英文)：Factors associated with stress responses and the need for support of wives accompanying their husbands stationed overseas were examined in an internet survey and interview. Trials of a World Cafe; with a theme of positive thinking were performed and the efficacy of this approach was analyzed based on the content of the responses and questions of wives. 【Results】Stress responses of wives were reduced by the presence of counselors or a relationship with others, even though wives had factors such as having preschoolers or difficulty going out. Wives had obtained social roles in their life abroad and had created networks outside their family. They were also developing an understanding of the meaning of their own experiences and gaining new values. Wives who attended the World Cafe; could sympathize with each other's experiences and gained peace of mind and confidence. These findings show that the World Cafe; provided these wives with an opportunity to network and identify their goals.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：海外派遣労働者の配偶者 コミュニティ支援 生活適応要因 ストレス反応 生活適応プロセス

1. 研究開始当初の背景

日本の経済活動を担う海外派遣労働者に伴い海外生活を選択、または余儀なくされている配偶者は約9万人、毎年2~3万人が新たに派遣に同行していると推計され、日本経済団体連合会は配偶者支援の重要性を示している¹⁾。

海外派遣労働者よりも配偶者は異文化への適応が困難²⁾であるといわれており、配偶者が心の問題を抱え³⁾、また、症状として疲労感や睡眠不足等の自覚症状を有している事例も多い^{4,5)}。しかし、異文化への適応は時間とともに文化変容カーブを示す⁶⁾ともいわれ、時間的経過とともに適応の指標となる心身の健康状態も変化すると推察される。生活適応の関連要因として、ソーシャルサポート、キャリア中断、性格や語学力などの個人特性、生活への満足度の低さが示されている^{7,8)}。しかし、経年変化を含めた配偶者の適応の特徴について明らかにしたものはないため、支援の方向性の示唆を得るための予測モデルがないことが課題の一つと言える。よって、エンパワメントの視点からの支援ニーズを明らかにし、支援の方向性を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、配偶者における生活への適応と関連する要因の経年的特徴および支援ニーズを明らかにするとともに、複数のコミュニティ支援方法を利用し評価することにより、配偶者のエンパワメントにつながる支援方法を検討することを目的とした。

この目的に対し、課題1：配偶者の生活への適応状況及び関連要因の特徴・経年変化の明確化と予測モデルの構築、課題2：配偶者の生活への適応プロセス及び帯同経験の意味の明確化、課題3：配偶者の支援ニーズの明確化、課題4：コミュニティ支援の試行と評価の4つを設定した。

3. 研究の方法

(1) 課題1：配偶者の生活への適応状況及び関連要因の特徴・経年変化の明確化と予測モデルの構築

1回目2016年12月~2017年1月に1年以内に夫の海外赴任に同行して渡航予定の配偶者および海外生活を送っている配偶者を対象にインターネット調査を実施した。1回目回答者に対し2017年12月~2018年1月に2回目のインターネット調査を実施した。1回目の調査において、職業性ストレス簡易調査票を用いたストレス反応とコミュニティ参加の関連、決定木分析によりストレス反応と要因の特徴を分析した。

(2) 課題2：配偶者の生活への適応プロセス及び帯同経験の意味の明確化

2017年7~8月に、H・I国滞在中の配偶者に対し、インタビュー調査を行い、ライフストーリー分析を行った。

(3) 課題3：配偶者の支援ニーズの明確化

課題1で実施したインターネット調査から、自由記述部分を取り出し、渡航前の不安と渡航後の困りごとを抽出し、カテゴリー化した。

(4) 課題4：コミュニティ支援の試行

A国配偶者に対し、ポジティブ思考を促す試みとしてワールド・カフェを実施し、参加者の発言と実施後の自由記述について、KJ法を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 課題1：配偶者の生活への適応状況及び関連要因の特徴・経年変化の明確化と予測モデルの構築

先行研究で示されている未就学児の有無、言葉の不自由さの認識、滞在年数の3要因と職業性ストレス尺度におけるストレス反応との関連では、未就学児を有し、言葉の不自由さの認識がある滞在期間1.5年以下の配偶者は、不安感と抑うつ感が高かった。1.5年以上滞在の配偶者においては、未就学児があり、かつ言葉の不自由さを認識しても、ストレス反応には関連がなかった。

ストレス反応と関連要因の特徴について、外出や買い物のしにくさの生活環境と言葉の不自由さの認識、未就学児がある場合にストレス反応にネガティブにはたらくものの、相談者がいる場合やコミュニティ参加を有する配偶者、3か月以上の海外生活の経験はストレス反応を軽減させる可能性を有していた。結果として示されたこととして、現地において人との付き合いがあり、言葉の不自由さを認識しても相談者がいる配偶者は活気が高かった。また、疲労感は、3か月以上の海外生活の経験がなく、滞在期間4.42年を超える配偶者に高かった。一方で、海外生活の経験があったとしても、コミュニティ活動への参加がない配偶者は疲労感を示していた。不安感、外出しにくい環境であること、言葉の不自由さの認識がある配偶者に高かった。更に、抑うつ感、言葉

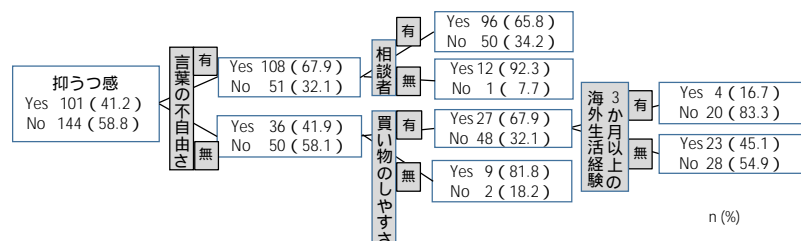


図1. 抑うつ感 (職業性ストレス簡易調査票) に関連する要因の特徴 N=245

の不自由さを認識していると高く、相談者がいるよりもない配偶者の方が抑うつ感を示す割合は高かった。一方で、言葉の不自由さを認識していないが、買い物がしにくい環境であっても抑うつ感が高かった。外出がしにくい環境の配偶者においてはイライラ感を示す者が最も高かったが、外出がしやすくても未就学児があり、渡航前に3か月以上の海外生活の経験のない配偶者もイライラ感を示していた。

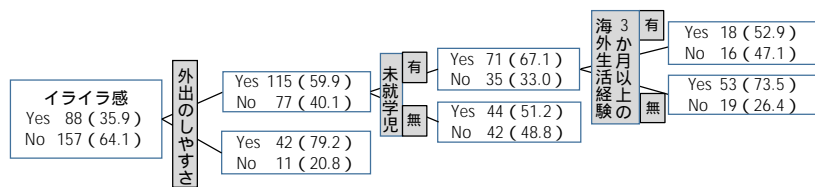


図2. イライラ感（職業性ストレス簡易調査票）に関連する要因の特徴

経年変化では、ストレス反応 2016 年と

2017 年の調査において、有意な差はなかった。相談者やコミュニティ参加の変化をみると、2 年未満の滞在者については、2016 年に相談相手がない配偶者は 33.3%であったが、2017 年には 8.3%と減少していた。また、日本人友人との付き合いを有する配偶者が 2017 年には減少していた。ただ、夫の現地会社関係者との付き合いは増加している傾向にあった。

2016 年の 4 年以上滞在者においては、人との付き合いがある配偶者が 2017 年よりも増加していた。また、調査両年とも相談者もコミュニティ参加もなく、また夫以外の関わりがない配偶者は約 15%存在した。滞在 1~3 年未満になると、相談者を有する配偶者は増加し、日本人友人との付き合いを有する配偶者は減少していた。人との付き合いはストレス反応を低減させる可能性があるものの、付き合いの難しさから関係を整理していく可能性も考えられる一方で、グループでの活動への参加を通して親しい配偶者を見つけている可能性が示された。

対象者数が少ないため統計的に課題はあるが、未就学児の有無や言葉の認識、外出や買い物のしにくさはストレス反応との関連が示される一方で、コミュニティ活動への参加や相談者の有無によって軽減につながることも示された。コミュニティ参加や相談者との関わりを有することで、同じような経験の共有や、安心感を得ることができるのではないかと推測される。また、海外生活や渡航前までの就労経験は、たとえ就学児がいたとしても生活の場の受け止めや柔軟さを得る機会となっているのではないかと考えられる。よって、このような生活環境や個人要因を有する配偶者は、渡航後の初期段階にネットワークを形成する機会が必要ではないかと考える。

(2) 課題 2：配偶者の生活への適応プロセス及び帯同経験の意味の明確化

12 人のインタビュー調査を行った。

子育て期にある妻は、現地での交友関係を通してネットワークを築いていた。また、H 国の婦人会での役割、I 国の文化遺産を学んで子ども達に伝えるボランティア活動などの社会的役割を得ていた。家族以外のソーシャルネットワークを持つことは、前向きな気持ちや低い自己肯定感を回避するうえで重要であると考えられる。

また、日本と異なる環境の中で、自分の思いと反する状況に置かれた場合、海外生活に特化した新たな価値観や人生観を得ていた。一方で、自己決定感を失うこともあり、渡航前と渡航後の自己概念を統合し、新たなアイデンティティを確立していく困難さが示された。社会的、文化的な制約を受けながら、自己の生涯キャリアにおける海外生活の意味づけをいかに行うのか、立ち止まって考える機会を得ることの重要性を配偶者に認識してもらえるような研修等が必要ではないかと考える。(研究協力者 鈴木清美)

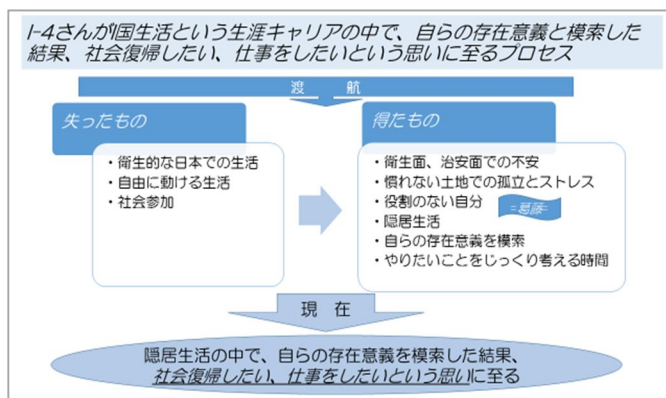


図 3. I-4 氏の適応プロセス

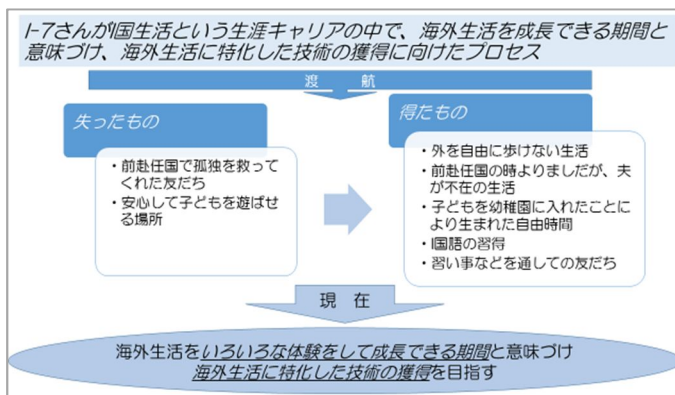


図 4. I-7 氏の適応プロセス

(3) 課題3：配偶者の支援ニーズの明確化

渡航前では、治安や社会情勢に関する不安を抱えている配偶者が多かった。一方、滞在中の配偶者では、日本の商品や類似品の手に入りにくさや交通手段の制限などの生活環境への困りごとが示されたが、治安や情勢不安による記述はなかった。

医療に関することでは、渡航前では漠然とした現地の医療事情に関する不安、感染症罹患についての不安、言語への不安が示された。しかし渡航後は、問題が起きた時の現地語での対応の困難さや不妊治療の情報が得られないなどの特別な医療情報の取得に関する困りごとが記述され、より具体的に示された。

渡航前では、現地の人との関係づくりや現地日本人との関係づくりに関する不安が記述された。滞在後も関係作りに関する困りごとが示され、渡航前配偶者よりもより多く困りごとを抱えていた。特に、相談者がいない、子育てや家事の協力者がいない、心を開ける友人がいないなどの記述がみられた。また、孤独感や不安感、肯定的な評価が得られないことなど、不安定さを抱えていた。子に関しては、現地生活の長い子のアイデンティティとの向き合い方に関する困りごとが記述されていた。

渡航前にインターネットで情報を得ることは可能であるが、記述されている主なものは日本人向けの生活情報ではなく、観光情報や事件である。情報を得たとしても現地生活のイメージがつかず、漠然とした不安が記述されたと推測される。一方で、インターネットによる情報過多によって自己消耗するおそれもある⁹⁾ことから、情報提供の選択時期と内容のスケジューリングも必要かもしれない。渡航前には企業格差が生じることがないように、企業の枠を超えた支援体制とピアコミュニケーションの機会が必要であると考えられる。

生活環境への馴化は体験やソーシャルサポートによって促進されてはいくが、渡航後の人との関係に悩む配偶者が多いこと、相談者や心を開ける友人がいないことなどから、配偶者は自己の行動特性について向き合うとともに、現地での居場所づくりへの支援も検討する必要があると推測する。尚、近年の世情の不安定さによって、渡航後の治安や世情の不安が調査時期よりも増大している可能性が高いと考える。

(4) 課題4：コミュニティ支援の試行

ポジティブ思考を促進させるためのテーマを設定したワールド・カフェを実施し、207個のポジティブな表現が記述された。参加者は18名だった。

A国のよいところとして、日本に近い生活を送れることを含め、広い住居環境や習い事のしやすさなど、生活がしやすい環境があげられた。また、優しい人が多い、様々な文化に出会える、他の人の力で助けられている、とよいところを見つけていた。

できたこと、頑張ったこととして、できなかったことができるようになった、積極的に行動するようになった、ゆったりと時間を過ごせるようになった、心の広がりを持つことができた、いろいろな場に参加できたなどが記述された。

調査票から、参加で得られたこととして、ネガティブ思考になりがちだったが、割とできたこともあるんだと自信になり、また考え方の切り替えや自己を肯定していいことの気づきが生まれた。

複数人で「できたこと」について話をするのは、普段話す機会のない自己の気持ちや頑張っていることへ意識を向けることによって自己肯定感につながり、自信になっていると考えられた。また、他者がうまく生活できているように見えても同じ悩みを抱えていることに気づき、安心や励みにつながっていたと考えられる。



図5.ワールド・カフェの様子



図6.ワールド・カフェでの作成物

(5) 総合考察

サンプルサイズが小さいため統計学的分析には課題があるが、生活への適応状況については、滞在年数に加えて個人の特性や環境要因が互いに影響し合っていることが示された。たとえば、外出のしやすさや買い物のしやすさなどの生活環境、また未就学児を有することなどの配偶者がコントロールできない要因があったとしても、相談者や現地においての人との付き合いがないと、ストレス反応を高める可能性があることが示された。しかし一方で、人との関係は、配偶者にとって負荷となる可能性も示している。その理由の一つとして、日本での生活と比較し、自己効力感を得られていないことや、限られた環境の中で気の置けない仲間を見つけることのできな

い辛さがあると推察される。課題 4 でワールド・カフェ形式のコミュニティ支援を試行したが、自己の生活を肯定的に捉えることは、生活への適応を促進させる可能性があると考えられる。特に、本研究の課題 1 で明らかになった外出のしにくい環境や未就学児を有する配偶者が渡航後初期段階でネットワークづくりの場に参加することは、親しい関係をつくれる同じ立場の配偶者を探せる可能性がある。他方、ストレス反応に関連する要因として言葉の不自由さの認識が示されたが、現地語能力よりも目標達成感等の満足度がソーシャルスキルの向上や異文化適応に影響している^{10,11)}という報告や、課題 2 のインタビューの結果から、配偶者のエンパワメントには、生活への目標や役割を見出すことの重要性を認識することが必要であると考えられる。よって、ポジティブ思考を促す会の開催は、配偶者のエンパワメントを促す方法のひとつとして有効といえる。

本研究では、当初予定していた Web での会の開催を見合わせた。世情が悪化した影響を考慮して実施を見合わせたが、現在新型コロナウイルス感染症の不安の中において、この Web での会の開催も今後有効な手段となると考える。開催時間や募集方法、1 回の参加人数について課題はあるが、他国の参加者との交流を図ることも可能となる。今後、Web 会議システムやグループワークが可能なシステムを導入し、会の開催を検討したい。

< 引用文献 >

- 1) 日本人社員の海外派遣をめぐる戦略的アプローチ ~ 海外派遣成功サイクルの構築に向けて ~ , 日本経済団体連合会 , < <https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/088.pdf> > (平成 27 年 10 月 14 日アクセス)
- 2) 宗像恒次 . 海外生活者のメンタルヘルス—こころのトラブルを防ぐ本 . 法件 , 1994
- 3) 田村 毅 . 在英邦人の適応上の諸問題 サマリタNZ日本語電話相談の事例から . 臨床精神医学 , 1993 : 22 (7) ; 1047-1056
- 4) 城戸昭彦 , 山田裕一 , 石崎昌夫 . 本多隆文 , 釣谷伊希子 , 熊川浩二 . 海外派遣社員とその家族の健康管理対策 (第 2 報) ヨーロッパ 5 か国における巡回健康相談 . 労働科学 , 1984 : 60 (3) ; 101-106
- 5) 井上雄弘 , 稲本幸雄 , 大野妃織 , 内田ほの , 武富由香 , 中野幸子 . 海外赴任社員同伴家族 (特に妻) のメンタルヘルスについての検討 . 松仁会医学誌 , 2004 : 43 (2) ; 163-168
- 6) Gullahorn JT, Gullahorn JE. An Extension of the U-curve Hypothesis , Journal of Social Issues, 1963 ; 19 : 33-47
- 7) 小山恵理子 . 在英日本人駐在員の配偶者の精神的健康にかかわる要因について . 心と文化 , 2008;7 (2) :165-155
- 8) Shaffer MA , Harrison DA . Forgotten partners of international assignments: Development and test of a model of spouse adjustment. Journal of Management, 2001 ; 27 : 99-121
- 9) 吉村肇子 , 白戸智 , 藤井聡 , 竹村和久 . 技術的安全と社会的安心 . 社会技術研究論文集 , 2003 : 1 ; 1-8
- 10) 安達一雄 . 外国人留学生の日本語能力と異文化適応について . 留学生教育 , 2002 : 7 ; 103-119
- 11) 憚紅艶 , 渡邊勉 , 今野裕之 . 動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福感および学習・生活への適応に及ぼす影響 . 目白大学心理学研究 , 2010 : 6 ; 43-54

表 1 . グループでの対話で得られたこと

得られたこと	コード
ちよっぴり自信	☑ ネガティブ思考になりがちだったが、考えてみるとできたことも割とあるんだなと少し自信になった。 ☑ 生活できるだけでもすごいことだと自信になった。
考え方の切り替え	☑ 少しポジティブに考えることができた。 ☑ 追い込まれれば何とかなんと切り替える。
自己を肯定	☑ タクシーに一人で乗れたのでも、自分をほめていいと気づけた。
振り返りによる自己の気づき	☑ 客観的に今までの自分を見直すことができた。 ☑ 度胸がついたと気づいた。 ☑ これからの目標を考えることができてよかった。 ☑ なかなか頑張っていることを表現できなかった。積極的にチャレンジしようと思った。 ☑ 案外自分が図太い神経だったと気づけた。 ☑ 言語に不安があったが、いざとなるとどうにかする度胸の大きさが備わっていることに気づけた。 ☑ できていることを表現したことで、自分で思っていたよりも行動力や積極性が高まっていると知った。
A 国のよいところ	☑ A 国のよい面を再認識できた。

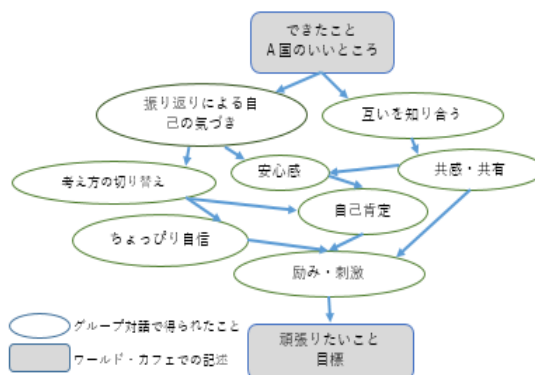


図7. ワールド・カフェで得たもの

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青柳美樹、多賀昌江、高山裕子	4. 巻 12
2. 論文標題 夫の海外赴任に同行する配偶者における渡航前の意不安と渡航後の困りごと Web調査における自由記述から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本渡航医学会誌	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 青柳美樹、多賀昌江、高山裕子、波川京子
2. 発表標題 Community Activities Factors Related to Stress Reactions of Spouses Accompanying Husbands Posted Overseas
3. 学会等名 The 15th Conference of The International Society of Travel Medicine（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木清美、青柳美樹
2. 発表標題 夫の海外赴任に同行する妻のキャリア
3. 学会等名 日本質的研究学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青柳美樹、高山裕子、多賀昌江、波川京子
2. 発表標題 海外赴任の夫に同行する配偶者が感じる困りごと
3. 学会等名 グローバルヘルス合同大会（日本渡航医学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木清美、青柳美樹
2. 発表標題 夫の海外赴任に同行する妻のメンタルヘルス
3. 学会等名 日本公衆衛生看護学会第6回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青柳美樹、高山裕子、多賀昌江、波川京子
2. 発表標題 Factors Based on Length of Stay Related to Stress Response of Japanese Spouses Accompanying Husbands Posted Overseas
3. 学会等名 The 32nd Triennial Congress of The International Commission on Occupational Health (ICOH) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青柳美樹、多賀昌江、高山裕子
2. 発表標題 海外派遣労働者帯同配偶者のストレス反応とコミュニティ参加、相談者の推移 2016年と2017年のインターネット調査から
3. 学会等名 第23回日本渡航医学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青柳美樹、高山裕子、多賀昌江
2. 発表標題 夫の海外赴任に同行した日本人配偶者のポジティブ思考を促す支援の試み ワールド・カフェを実施して
3. 学会等名 第26回多文化間精神医学会学術総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 多賀昌江、青柳美樹、高山裕子
2. 発表標題 海外駐在員配偶者のストレス反応と関連要因の特徴
3. 学会等名 感性フォーラム2019
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高山 裕子 (Takayama Yuko) (00637803)	東京医療保健大学・医療保健学部・准教授 (32809)	
研究分担者	多賀 昌江 (Masae Taga) (20433138)	北海道文教大学・人間科学部・准教授 (30121)	
研究協力者	鈴木 清美 (Suzuki Kiyomi)		
研究協力者	澤田 直子 (Sawada Naoko)		
研究協力者	河原 智江 (Kawahara Chie)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	波川 京子 (Namikawa Kyoko) (30259676)	川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授 (35309)	